連載　第108回

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家　三木　哲

首都ヤンゴンの黄金に輝く高さ100 mのシェッタゴン・パゴダ

パガンの仏教遺跡群

●トヨタカローラでミャンマーを縦断する

30年程前、1990年代前半にミャンマーを南から北へ縦断し旅する機会があった。

バンコク経由で空路、首都ヤンゴンに入った。

当時この街は樹木の緑が茂り、道路は舗装されておらず砂地で、人々は草履を履いていた。

東南アジアではヒンズー教、イスラム教、仏教が混在しているが、ヤンゴンの街では僧侶の姿が目立ち、道行く人々は僧侶を見かけるとその足元にぬかずき敬意を表す人も少なくなかった。

ミャンマーは敬虔な仏教国で、軍人は僧侶ほど慕われている様子も、いばっているわけでもない。目立たない存在と思われた。

旅は造園会社の社長と管理会社の営業マンと私。現地のガイドが運転するひと世代前のトヨタカローラに同乗してこの国を縦断し往復した。

ヤンゴンで高さ100mの黄金に輝くシェダゴン・パゴダの仏塔を見た後、イラワジ川中流の東岸、140㎞の平野に広がるパガン仏教遺跡に向かった。

10～13世紀に栄えたパガン朝の仏教遺跡は世界三大仏教遺跡と言われ、数千基以上の仏塔や寺院が立ち並び、荘厳な景観だった。

僧侶の姿は見られず、宗教的役割を終えた石造遺跡群でしかなく、我々は下足のまま遺跡に登り、石造彫刻や周辺の遺跡建造物群などをつぶさに眺めることができた。

パガンから北の古都、マンダレーに向かった。

ミャンマーの国土は日本の約1.8倍。鉄道網が未発達なこの国では自動車の移動に限られる。

日本では華奢なファミリーカーのイメージのカローラは、この国では強靭で逞しく、全くトラブルもなく砂煙を上げてこの国の大地を疾走した。

第２の都市マンダレーから更に北上し、目的の石切り場についた。仏塔の基壇の床に敷かれ、掃き清められた床石の上では、40℃を超える熱帯の炎天下で僧侶が素足でお経を唱え行事を行う。

それでも僧侶は足の裏をやけどしない。

どんな石なのだろう。

それを求めてこの国の北部の奥地にまで来た。

この石を日本のリゾート施設のプールサイドの床に使えないか、素材の質感や石材の加工技術を調べ輸入は可能か見に来たのだ。

採石場を見学し、切り出された石と加工し製品化する機械や加工場を見学し、切石の寸法形状や精度を調査し、採用可能か、製品の材料原価や輸送費なども検討した。

これで目的は半分達成したので再び南下し、シャン高原にある大きな湖、インレー湖に向かった。

湖の水上に家が建ち、約15万人の人々が水上で生活している。

その家の基礎や柱、梁などの主要構造部は木造で、壁や床、天井は主に竹でできていて、屋根は草葺きだった。風通しの良い竹で構成された高原の湖上の住まいは、熱帯気候にあって快適な生活空間を提供していた。

湖内には電柱も立っていて、手漕ぎの船で移動していた。大きな浮草の島は畑になっていて水耕栽培がなされていた。

ここでカローラと別れ、空路ヤンゴンに向かった。

双発のプロペラ機で貨物用の飛行機に客席を乗せたような造りで、グラグラな背もたれで、シートベルトは無い。大きなバナナなどの貨物とともに飛び立った。

ヤンゴン空港に近づいたころ急に天候が悪化し、激しいスコールが滑走路を覆った。パイロットは着陸を試みたが失敗し、再び大空に舞い上がった。タッチ＆フライトを繰返した頃、同乗していた僧侶が機内でお経を唱え始めた。

必死のお経が通じたのか、無事ヤンゴン空港に着陸した。

その後、年を経て、民主勢力が選挙で圧勝し、市場経済が発展し、海外資本が投資を開始した正にその時（2021年２月）、軍部は民主勢力に武力弾圧を開始し、ミャンマーは軍事独裁ファシズム国家になった。

この国の軍部がシビリアンコントロールの元、成熟した市民社会と民主主義国家に再生するには、50～100年ほどの時間が必要に思える。

みき・てつ
㈲共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。